

「アメリカ人は本当に子どもが好きか？」

by Kenneth Keniston

(児童に関するカーネギー会議議長)

Childhood Education

October 1975

はじめに——アメリカにおける子どもの実態——

一九七二年の終り、ニューヨークのカーネギー基金によって「児童に関するカーネギー会議」が設立された。この会議は、その議長を勤めるケネス・ケニストン（イェール大学精神医学教授）によると、次のような特色を持つものである。「この会議は、経歴も、専門分野も、考え方も異なる十二人の男女から成る小さな私設委員会で、アメリカの子どもたちと家族の満たされていない要求や問題、及びその中で最も緊急の解答を要する問題を理解していくことにある……」この会議の意図するところは、国際児童教育連盟（ACEI）のアクション・プログラムの一つ「児童の尊厳と尊重」と極めて関連深いところから、会議の経過報告の一部を「Childhood Education」で紹介することになったのである。

「アメリカ人は、本当に子どもが好きか？」という悲憤感に満ちた標題から、今日のアメリカの子どもの置かれている状況について、あるイメージを持つことができるが、最近アメリカの子どもや家族にどんなことが起こっているのか、ケニストン教授の叙述から捕え、我国（日本）の子どもや家族の問題を考える糸口にし

たい。

「アメリカ人は、本^{ほん}当^{たう}に、子^こどもが好^{この}きか？」という問に對して、きつぱりとした「はい」と、不愉快^{ふげつがい}そうな「いいえ」という二つの答のうちどちらかが、返^{かへ}つて來ることであらう。

私たちの感情を証^{あかし}拠^たとして使うことができるなら、勿論^{もちろん}私たちは子どもが好^{この}きだ、彼等^{かれら}を愛^{あい}しているときさえ答^{こた}えられる。もし、私たちが信^{まを}じているテストや、私たちが育^{はぐ}み、祝^{いわ}福^{ふく}し、世^よ代^{だい}から世^よ代^{だい}へ受け継^ついできた神話^{しんわ}に価^か値^ちが認^まめられるなら、アメリカは、子どもを愛^{あい}する国^{くに}であるばかりでなく、子ども中心^{こどもしんしん}の国^{くに}であるとさえ言うことができる。しかしこの素晴らしい感情は、あまりにもしばしば、あまりにも長いこと、名^な状^{じやう}し難^{がた}い、それでいて一貫^{いっくわん}している複雑^{ふくざん}な社会的、經濟^{けいぎ}的な圧^{あつ}力^{りき}によって、損^{そん}われ、傷^{やう}付^けけられてきた。従^{したが}つて、今^{いま}や、「いいえ、私^{わたし}たちは、本^{ほん}当^{たう}は、子^こどもが好^{この}きではない」と答^{こた}えなければならぬ時期^{じき}に來^きているし、それを裏^{うら}付^けける事實^{じじつ}も沢^{たく}山^{さん}あると、ケニストン教授^{けいじゆつ}は主張^{しやうけん}するのである。

例^{れい}えば、アメリカの乳^{ちち}兒^ご死^し亡^{わう}率^{りつ}は呆^{おろ}れる程^{ほど}高^{たか}く、国^{くに}連^{れん}の調^{てう}査^さによると四^よ十^{じゆ}二^にか国^{こく}中^{ちゆう}、十^{じゆ}五^ご位^い（香^{かう}港^{かう}の上^{の上}）にラ^らンク^くされてい^いる。また農^{のう}業^{ぎやう}生^{せい}産^{さん}が增加^{ぞうか}しているにも拘^から^ず、百^{ひやく}万^{まん}人^{にん}の子^こどもが飢^うえと榮^{えい}養^{やう}失^{しつ}調^{てう}で苦^{くる}んでいる。子^こどもは、生^{せい}活^{かく}上^{じやう}の基^き本^{ぽん}的^{てき}な物^{ぶつ}質^{しつ}的^{てき}

要求^{やうきう}を満^みたす權^{けん}利^りを持^もつてい^いると言^いわれながら、六^{ろく}人^{にん}のうちの一^{いち}人^{にん}は、政^{せい}府^ふが決^{けつ}めた貧^{ひん}困^{こん}以^い下^げ、二^に人^{にん}に一^{いち}人^{にん}は、「最^{さい}低^{てい}だ^だが暮^くらせ^せる」生^{せい}活^{かく}をしてい^いる現^{げん}状^{じやう}である。就^{じゆ}学^{がく}前^{ぜん}兒^ご童^{どう}の母^ぼ親^{しん}の三^{さん}分^{ぶん}の一^{いち}、学^{がく}童^{どう}の母^ぼ親^{しん}の半^{はん}数^{すう}は働^{はたら}きに出^いでい^いるが、今^{いま}もつて子^こどもに對^{たい}する適^{てき}切^{せつ}な世^{せい}話^わの必^{ひつ}要^{やう}性^{せい}を主^{しゆ}張^{ちやう}しなけ^ればならぬ実^{じつ}状^{じやう}である。更^{さら}に、学^{がく}校^{がう}制^{せい}度^どは、すべ^すての子^こどもに平^{へい}等^{とう}な機^き會^{かい}を与^よるはずのものなのに、実^{じつ}際^{さい}は十^{じゆ}二^に年^{ねん}の義^ぎ務^む年^{ねん}限^{げん}に、貧^{ひん}富^ふの差^さを拡^{くわ}大^{だい}してい^いる。他^たの国^{こく}の人^{ひと}々^々は、ア^あメ^めリ^りカ^かを科^か学^{がく}技^ぎ術^{じゆつ}の進^{しん}歩^ぽした、物^{ぶつ}質^{しつ}的^{てき}に、豊^ゆ富^ふな国^{こく}と見^みてい^いるかもし^しれないが、私^{わたし}たちは他^たの工^{こう}業^{ぎやう}化^かの進^{しん}んだ国^{こく}々^々を、子^こどもと家^か族^{ぞく}を支^さえ^える幅^{はく}広^{くわ}いシ^しス^すテ^てム^むを持^もつた進^{しん}んだ国^{こく}と見^みてい^いかなければならぬ。カ^かー^かネ^ねギ^ぎー^ぎ会^{かい}議^ぎの判^{はん}断^{だん}によ^よると、この分^{ぶん}野^やに關^{かん}して、ア^あメ^めリ^りカ^かは全^{ぜん}く「後^ご進^{しん}国^{こく}」な^なのだとい^いう。何^{なに}故^こ、このよ^ようなこ^ことにな^なつてい^いるのか。その病^{びやう}根^{こん}は、そ^そもそ^そも經^{けい}濟^ぎシ^しス^すテ^てム^むにある^ある^るのだが、こ^ここでは三^{さん}つ^つの問^{もん}題^{だい}——家^か族^{ぞく}数^{すう}の縮^{しゆく}小^{せう}、子^こども^{ども}の知^ち的^{てき}偏^{へん}重^{じゆう}主^{しゆ}義^ぎ、阻^そ害^{がい}の恒^{こう}久^{きう}化^か——から子^こども^{ども}を損^{そん}つてい^いるもの^{もの}の社^{しゃ}會^{かい}分^{ぶん}析^{せき}を行^いな^なつてい^いる。

一 家族数の減少

最近^{さいじん}の統^{とう}計^{けい}は、外^{がい}で働^{はたら}く母^ぼ親^{しん}の急^{きゅう}増^{ぞう}を伝^{でん}えてい^いる。開^{かい}拓^{たく}時^じ代^{だい}に、た^たいてい^いの母^ぼ親^{しん}は外^{がい}で一^{いち}日^{にち}中^{ちゆう}働^{はたら}いてい^いたが、そ^その頃^{ころ}と現^{げん}在^{ざい}と

の著しい違いは、家族数の減少である。家族数縮小の原因は、離婚率の急増、核家族化、兄弟数の急減及び、未婚の母の増加等による。これによって、益々多くの子どもが、長い時間誰も世話をしてくれる人のいない家庭で過ごさなければならなくなってきた。それでは何が家族に替わる役割を果たしているかというところ、まず第一にテレビ。テレビは今や多くの子どもにとって、チラチラした青色を楽しむ両親となっている。第二は仲間、そして第三は学校や幼稚園があるいは共働きの両親が見つけ出した種々の子どもを保護する施設。今日、数百万のアメリカの子どもが、このように身内以外の者と、家庭の外で大部分の時間を過ごしてお

り、「鍵こ子 (Latchkey children)」と呼ばれる、一人置き去りにされた子どもも増えている。

その結果、働く母親の大多数は、罪悪感を持ち、子どもが放置されていることを心配しながら働いているのである。生計のために、男性よりも安い賃金でも、下等な仕事でも働かなければならない。経済的な圧力が絶えず我々にのしかかっている実状の中にあっても、子どもたちは家族の中で、家族から、一貫した保護と養育を受けるべきであるという感情をしばしば伴うことは、会議の間で次第にはっきりしてきたことである。こうした感情は、疑いもなく現実的で重大な問題となっているのに、それは社会にと

って無関係なものとして、親を親として援助することを怠っている。外で働けば賃金を払い、育児に専念する男女は無報酬というのでは、アメリカの家庭は荒んでいく一方である。もし、家庭が、寮、即席のサービスをする食堂と娯楽センター、消費単位として以上の意味を持たなくなるとしたら、(事実、急速にそうなりつつあるが) 私たちは、その主な理由を、アメリカの怠慢のみならず、経済の圧力の中に見出していかなければならない。もしそのような事態が発生したら、子どもに対する私たちの本^{ほん}当^{たう}の態度について、どう評価されるかは自明である。

二 子どもの知的偏重主義

子どもが良い家庭から得られるかもしれないものを、子どもから奪い取っている間に、私たちは、学校で子どもに何を与えてきただろうか。私たちは、子どもを(大人と同様に、全人的面から見なければいけないのに)ますます「頭脳」として見る傾向にある。学校や幼稚園の教育は、極めて狭く定義した認知技術や能力を強調し、人間の他の潜在力を著しく無視している。

ヘッド・スタート・プログラムは、その評価の出た時、様々に批判された。大方の批判は、教育プログラムというものは、一日二、三時間それに参加すれば、貧困家庭の圧倒的な不利を簡単

に取り除くことができるという楽観論に向けられた。「文化喪失」を単に知的刺激の欠如に帰してしまつたが、文化喪失や貧困の原因をなしているものは、経済制度であることを、この際見定める必要がある。

ヘッド・スタートは確かに、社会の底辺の子どもの能力促進や医療サービスという点では成功してきた。しかし一方、知的発達やテストの点数等、量的に測定可能な物差しで、子どもをランク付け評価するという悪い傾向も生み出してしまつた。この傾向は、単に教育界にとどまらず、大人の社会にも見られることであるが、教育効果や価値判断の中心的尺度、更には経済システムやそれについての考え方も、もっと質的な規準によらなければならぬとケニストン教授は主張する。

三 阻害の恒久化

「アメリカの全児童の四分の一がうまく育てられていないというのは、悲劇的な事実である」という部分は特別に強調してイタリック体で記述している。阻害の原因として、人種問題、貧困、ハンディキャップ、両親の生活苦からくる子どもへの愛情不足という四つがあげられるが、中でも最もひどい阻害は、身体的なものではなくむしろ社会的、心理的なものである。阻害され、基本的

要求を拒否されている子どもが学ぶものは、失敗感だけである。彼等はやがて、状況を乗り越える最も良い方法は、探究心を押え、危険を犯さないようにするか、逆に、絶えず攻撃することであると思うようになるだろう。

米国の歴史が謳歌してきたテーマは、平等とフェアプレイであり、特定の子どもにも重荷を負わせるべきだとは歌ってこなかった。それどころか、いつの時代にも同じ約束を繰り返してきた。「あなたの子どもを含めて、この地に住むすべての者が、アメリカ社会の完全なメンバーとなるう」と。米国の歴史はこの約束を確かなものにする努力を行なつて来たが、その歩みはあまりに遅く、不完全なものであつたと言わざるを得ない。

阻害の恒久化は、個人の非道德の故というよりも、私たちの社会の機構、既に百年以上も続いてきたその機構に原因がある。この国の富と収入の配分は百五十年來変化していない。一方私たちは、革新、成長、利潤を休みなく求める社会制度の中に生きていくのであるから、どうすればその制度がよく機能するか注意していかねばならない。少なくとも悲劇的なこと、破壊、飢え、虐待等に支払われるとてつもなく巨大な浪費はすべきでない。

終りに——残された課題——

以上述べた三つの問題の原因は、経済システムにあることを自覚し、家族や子どもを混乱させているこれらの原因を除去する活動が必要となる。即ち、現在も子どもを育てているすべての家族を支えるような、わかりやすく、誰もが例外なく利用できるような施設——特別の人の為ではなく、権利によって、すべての人が利用できる施設——を発達させること、これこそは子どもの尊厳を守るために直ちに組み込まなければならない課題である。

アメリカ人は、建国以来個人主義に頼ってきた。しかし今や、個人的な抵抗ではどうすることもできない社会的経済的な力の存在を知るべき時である。個人主義は大切に存続されるべきことは確かであるが、個人同士が競争する古い型の個人主義ではなく、関係する人々が家族のようにふるまうような形に移行すべき時である。

最後に、ケニストン教授は、「残された課題は、これまで述べてきたことを直ちに実行することである。それができた時、アメリカ人は、初めて本当に子どもが好きであると答えることができるのである」と結んでいる。

ケニストン教授の論文を読んで、二十世紀がエレン・ケイによって児童の世紀と期待されたにもかかわらず、子どもを取り巻く現状は暗澹たるものである思いがした。彼の掲げる問題は、遠い異国のことではなく、アメリカを先進国として仰いできた日本の子どもや家族の直面している問題でもある。日本は、心情的には子どもを大切にし、中心に置いている国と言われ、米国のようにひどい阻害は表面上ないように見える。しかし、急激な自然破壊や試験地獄の中で、子どもは自由な時空間を奪われ、心まで荒廃させられているのではないだろうか。私たちが「本当に子どもが好きである」と答えられるには、どうしたら良いのか考えてみたいと思う。

(お茶の水女子大学・清水いく子)



この論文は、米国においても賛否両論のあるところで、この論文に書かれた実態が果たしてあるか否かを検討するため、ACE Iでは「追跡調査」委員会を設置している。その報告は追ってなされるので関連記事は、再び紹介する予定である。米国が当面する問題の大きさを理解するだけでなく、あえて恥部をあばき出し、それに序列をつけて解決にあたらうとするその姿勢も理解されてよい部分と思われる。

(大戸)